

どうなる「空飛ぶクルマ」

写真は9月21日の大阪市会・都市経済委員会で入手した「大阪・関西万博における空飛ぶクルマ 2地点間運航の各社イメージ」(8月30日博覧会協会公表資料)。確か大阪維新の会の委員が、この資料をもとに空飛ぶクルマを万博の目玉だと発言していたと思う。

この空飛ぶクルマが万博の目玉になるのは困難なようだ。毎日新聞13日・14日朝刊から問題を見ていこう。

乗客を乗せた「商用運航」に向けた機体量産が、開幕に間に合わない見通しとなっていることが分かった。

事業者となる4つの企業グループ中、2つは量産に必要な安全認証取得が遅れ、うち1グループは商用運航を断念。調達できる機体数は4者とも最大数機の見込みだ。各事業者が12日までに明らかにした。

大阪府の吉村洋文知事は、空飛ぶクルマを「空の移動革命」と位置付け、万博での商用運航を契機に社会実装を目指すと強調してきた。13日で万博開幕まで1年半。安全を保証するハードルの高さが浮き彫りとなった。

吉村知事は13日、報道陣の取材に商用運航を目指す方針には変わりはないとした上で、「飛ばせば十分。最初から地下鉄のように飛び交うイメージにはならない」と強調した。自見英子万博担当相は同日の閣議後記者会見で「量産体制の整備までを必ずしも求めている」と述べ、万博での飛行実現には支障がないとの認識を示した。

空飛ぶクルマは「電動」「垂直離着陸」などの特徴を持つ航空機。国や大阪府・市は「未来社会を象徴する乗り物」として万博での商用運航を実現させ、その後の普及につなげる構想を描いてきた。万博では会場の夢洲と大阪市湾岸部や兵庫県尼崎市などとの間を結ぶ2地点間運航の実現に向け、民間の4つの事業グループが準備を進めている。ある事業者は取材に「万博ではデモ飛行にとどまる」との見通しを示すなど、どの程度の輸送力を確保できるは不透明だ。

海外パビリオンとともに、万博の迷走を象徴するようだ。吉村知事の発言は、その場しのぎで一貫性がなく、相変わらず拍子抜けさせられる。

(2023年10月17日)

運航事業者	ANAホールディングス /Joby Aviation	日本航空	丸紅	SkyDrive
使用予定機体	 Joby Aviation(米) [航続距離160km 定員5名]	 Volocopter(独) [航続距離35km 定員2名]	 Vertical Aerospace(英) [航続距離160km 定員5名]	 SkyDrive(日) [航続距離15km 定員3名]
想定する会場外ポート候補	・会場周辺の湾岸・河川沿いの適地を念頭にANAホールディングス/Joby Aviationにおいて検討・調整中。	【桜島】 	【尼崎フェニックス】 	【大阪港・中央突堤】 
運航イメージ		・桜島-会場間の2地点間運航	・フェニックス地区-会場間の2地点間運航	・中央突堤-会場間の2地点間運航